

井口寛司選手が愛した

神戸ドルフィンの歴史

(文中敬称略)

平成3 (1991) 年：神戸ドルフィンズ結成！

法曹野球でも勝てない「神戸ローヤーズ」からの脱却を目指し、チーム名も投票により決定。



この年、幸寺-藤掛のバッテリー入部がドルフィンズ結成の原動力となり、初めて全国大会予選に参加。1回戦・岡山チームとの対戦は、バッテリーにとっても初の公式戦であった。



岡山戦での圧勝(2対12)に沸くド軍だが、2回戦は広島チームに手痛いサヨナラ負けを喫する。最後の打球は「井口のところに飛んだ」とスコアに記録(井上監督・談)。井口寛司選手の悔し涙が乾く前に出来た「ド軍替え歌第1号」こそが「ひろぎんの森夏景色」である。

平成5（1993）年：全国決勝大会（神奈川県・平塚球場）初出場！

グリーンピア三木で大阪チームとの雨中の決戦を制し、滋賀県の野球場で京都チームを破って、神奈川県・平塚球場で開催された全国大会に初出場！ 創部3年目にしての快挙であった。



しかし、初戦の札幌戦で8対1と大敗を喫し、全国大会レベルの高さを思い知らされる。



HIRATSUKA											KYUJŌ										
PL	1B	2B	3B	LL	RL	TN	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	R	H	E	1	2
■	高松	大矢				S	3	3	0	1	1	0					8	8	0		
■	橋本	津崎				K	1	0	0	0	0	0					1	2	8		
TN 4 7 6 1 3 8 5 2 9 札鶴岡赤山馬郷毛吉山 梶嶋田藤崎場川利川本											TN 3 6 8 2 7 1 4 9 5 神箕林井藤渡幸土増松 戸 口掛部寺井田本										

右も左もわからない状況での初出場だったが、神戸での全国決勝大会開催を翌年に控え、ともかくも全国大会を経験できたことはド軍にとって幸運だった。



1 回戦は岐阜戦。岐阜の三塁走者はショートゴロの間にホームを狙ったが、井口遊撃手が打球をつかみ即座に本塁送球態勢に入ったため、走者は逡巡して態勢を崩す。井口はそのまま走者目掛けて猛ダッシュしてタッチアウト！ 本当に見事なファインプレーであった。詳細は替え歌集の「手加減しやがれ (勝手にしやがれ)」を参照されたい。なお、試合結果は10対2。

準決勝は広島戦。2対6xは結果として大敗ではあるが、広島チームはこの大会で優勝したのであるからと渋々納得。まだまだ全国大会「初心者」のド軍はさらに精進が必要と猛反省。

平成 12 (2000) 年：大阪・京都を破って名古屋ドームへ！

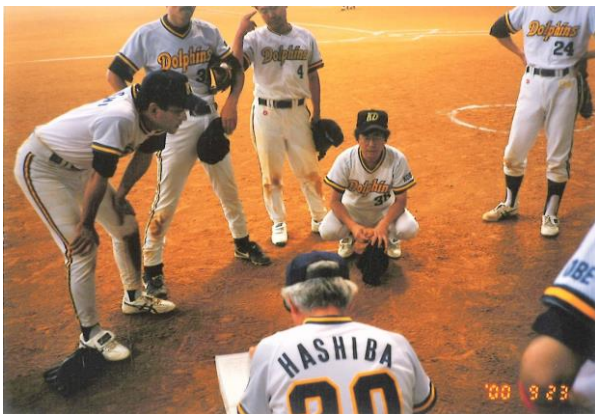
神戸決勝大会の翌 (1995) 年に我々を襲った阪神淡路大震災は、日常生活はもとより弁護士業務にも多大な打撃を与えた。殊に、神戸市内の野球場・グラウンドには瓦礫や資材が積み上げられたり、仮設住宅が建設されたりして、野球部活動に不可欠なグラウンドの確保が極めて困難となったため、遠征試合や合宿でしか野球部の活動を続ける方法がない状況に陥った。

だが、所詮、野球は「お遊び」に過ぎない。家族を、日常生活を、そして仕事をけっして犠牲にはできない。それでも我々はあきらめなかった。逆境のさなかにあつて全国決勝大会出場への憧憬は増すばかりだが、如何せん大阪に勝てない。「打倒大阪！」はド軍の悲願となった。

雌伏の時代を経て 2000 年には大きなチャンスが到来した。52 期 10 選手の加入である。戸谷、吉田 (哲)、吉田 (裕)、村上 (英)、柿沼、中園、本郷、栗本、岡崎、白川らがこぞつてド軍の門を叩いた。まさに新人ラッシュ。本当に嬉しい悲鳴であった。

迎えた 2000 年のブロック予選。京都・大阪・神戸のうち、名古屋ドームに進出できるのはたった 1 チーム。20 世紀最後の「三つ巴」決戦。その戦場は但馬ドーム！

第 1 試合は 5 対 2 で神戸が京都を下し、第 2 試合は 17 対 1 で大阪が京都に圧勝、第 3 試合がまさにファイナルとなり、5 対 2 で神戸の大勝利。対大阪戦としては実に 7 年ぶりの快挙。



さて、名古屋ドームで待っていたのは「日弁連野球の球史に残る」とまで言われた横浜マリナーズとの激戦であった。「ルーズヴェルトゲーム」という呼び名をご存じだろうか。「点を取られたら取り返し 8 対 7 で決着する試合」のことで、第 32 代アメリカ合衆国大統領フランクリン・ルーズヴェルトの言葉に由来する。



藤掛伸之捕手の逆転満塁弾 (ランニング HR) は秀逸だった。結果的には再逆転され、7 対 8 x の「ルーズヴェルトゲーム」で横浜に敗れたが、藤掛はこれに満足して引退を決意する。ド軍にとって大きな痛手に見えたが、のちの「名捕手・井口寛司」の誕生が運命づけられた歴史的瞬間でもあった。



ただ、息詰まる大接戦を制することができなかつただけに、井口・幸寺ら主力選手の落胆も大きかった。井口は「自分のセンターからのレーザービームが藤掛捕手のミットにおさまっておれば勝利の女神がド軍に微笑んだはず」と、ずっとずっと長いあいだ悔しがっていた…と藤掛は述懐する。井口のセンターからの送球を見て瞬間的に「ストライクだ」と確信した藤掛もまた同じ意見だったらしい。ただし、井口のレーザービームに途中で触れてしまったとされる人物が何も口にしないので、事実関係は永遠に謎のまま（笑）。とはいえ、このときの対戦が「緑」となり、翌年から名古屋・横浜の両チームと定期戦が開催されるようになって、20年を優に超えた現在も「三港戦」として定着している。本当にありがたいことである。

また、井口・藤本の「ひまわり・こまわり」コンビが、全国大会の懇親会で替え歌を披露したのは名古屋ドーム大会が初めてのことである。このとき披露した替え歌がいったい何だったのか…制作時期から考えて1つは「近畿三強だい！」（だんご三兄弟）ではなかったか？ あと1つは、う～ん、思い出せないぞお！



（巻末に井口選手が制作に関与した「替え歌集」を編集・掲載する。どうぞお楽しみあれ）

平成 14 (2002) 年 : D ブロックから全国大会 (埼玉・西武ドーム) へ

細かい事情はさておき、ド軍は日弁連野球連盟の心温まるお取り計らいにより、2002 年より、これまでの C ブロックから D ブロックへの「お国替え」が許された。「だんご三兄弟」の替え歌がウケたからではないだろうけれど。

尾道の「しまなみ球場」での予選対戦相手は、北九州マツツ及び沖縄ゲラーズ。大阪チームの汚いヤジから解放され、ド軍は伸び伸びと野球をすることが出来た。また、この年からの試みだったが、試合前に井口捕手と藤本代行が代わる代わる投手のボールを受け、二人で合議のうえ先発投手を決め、各選手の調子を見て打順を決定するようになった(猫の目打線)。いつも二人の意見が一致したのは不思議というか、たいへん「幸い」なことであった。



試合結果は、北九州戦を 9 対 1 で、沖縄戦を 0 対 3 x でいずれも神戸が制し、埼玉・西武ドームで開催される全国決勝大会へと駒を進めることが出来た。この試合後に井口捕手がドルフィンズの ML (メーリングリスト) に流したメールをご紹介します。

【井口捕手のメールより (抜粋)】

重要なことは、投手の選択に成功した点です。朝の投球練習で幸寺投手のコントロールがとてもよかった。これに対し、箕投手は、変化球は問題ありませんが、ストレートの縦回転が切れておらず、走りがほんの少し不足していました。実は、この投手選択を試合直前に決断した藤本代行の勝利だったと言えます。今まで、試合直前の状態をみて、先発投手を決定したことはありません。すごいチームになったなあと思います。

当時、井口は正捕手となって 2 年目で、事実上のキャプテンとしてド軍をまとめるべき立場を強く自覚するようになった。そして、かつて井口鬼軍曹が徹底的に鍛えようとした藤本二等

兵については雑務処理能力の高さの方を重視し、これを伸ばすことでド軍における働きを充実させようと考えた。すなわち、井口は代行を戦闘員として育てることに終止符を打ち、むしろ非戦闘員としての雑務処理能力をさらにアップさせることで、ド軍を下支えすることを強く意識して、代行との「二人三脚」を大切にするようになったのだ。

まさに替え歌制作の過程と同じく各自の持てる別異な能力の絶妙なコラボレーションが構築されるという構図であった。だからこそ、上記メールには代行に対する「ヨイショ」が多少、いや多々入っている。この頃から井口は「代行！」という呼び掛けを盛んに行うようになり、代行に対して「判断力」「牽引力」等の発揮を強く求めるようになった。

しかし、まあ運が悪いときには、代行の雑務処理能力もその真価を発揮できない。その一つが全国決勝大会における「組み合わせ抽選」であった。せっかく予選で大阪との対戦がなかったにもかかわらず、西武ドームでの初戦の相手はなんと大阪だ！ 代行の余りの「クジ運の悪さ」に井口は泣いた。しかも、第1試合はなんと開会式の前に実施されたのだ。開会式は試合（神戸2対6x大阪）の終了後に始まったが、ド軍にとっては閉会式になったという悲劇。

ブロック替えには成功したが、どうしても大阪との「悪因縁」が切れない。ここで我々は大きな教訓を得た。予選であれ決勝大会であれ、大阪を倒さない限り全国大会での優勝はないという、まさに「あたりまえ」の教訓であったが。



なお、コケてもタダでは起きないひま・こまコンビは、大阪戦をテーマにした「開会前の試合（3年目の浮気/ヒロシ&キーボー）」と、埼玉チームの敗戦を慰める「埼玉に贈る言葉（贈る言葉/海援隊）」の2曲を懇親会直前に完成させ、2人で熱唱・披露するという芸当をやったのけた（笑）。

平成 15（2003）年：全国大会（札幌ドーム）で準決勝進出！

この年もDブロックからのスタート。沖縄と佐賀・長崎そして神戸の3チームが一同に会してのリーグ戦三試合になる予定だったが、JALの欠航が原因で沖縄チームのメンバーが第1試合（沖縄対神戸）に間に合わないアクシデントが発生。佐賀・長崎チームのご理解と温かいご配慮により、第1試合を中止してリーグ戦をトーナメントに組み替え、第2試合（沖縄対佐賀・長崎）の勝者がファイナル（第3試合）で神戸と戦う組み合わせに急遽変更。その結果、

沖縄が26対6で佐賀・長崎を破ってファイナルに進出し、最終的に4対6xで神戸が何とか沖縄を制し、札幌大会への切符をゲット。なお、予選開催後の懇親会は古坂弁護士夫妻の三線（蛇皮線）演奏で大いに盛り上がり、最後はカチャーシー（総踊り）で締めくくられた。

こうして乗り込んだ札幌ドームであったが、またもや代行の「クジ運」の悪さで第1試合をチョイス。相手は新潟。大阪及び京都も札幌決勝大会に進出しており「近畿3強だ！」がぶつかる可能性もあったがここはクリア。しかし今度ばかりは開会式を閉会式にしたい！

そんな思いも杞憂に終わった。ド軍は初対戦の新潟チームを9対4の大差で破り、準決勝へと駒を進めたのだ。準決勝の相手は5連覇を狙う常勝・東京チーム。「向こうが常勝ならこちらは上昇チームだ！」などと意気込んで臨んだ東京戦、残念ながら5対9xで敗退。ただ、東京は一回戦で京都、決勝戦で大阪とあたるという「近畿3強だ！」対戦ばかりだったが、東京から5点をもぎ取ったのはド軍だけ。京都は0点、大阪は1点止まりだったのだから（笑）。



平成17（2005）年：全国大会（大阪ドーム）で因縁の対決を制す！

Dブロックに移って4年目のこの年、ド軍にとって最大の試練かつチャンスが訪れた。予選の相手は広島及び北九州。この2チームを破れば全国決勝大会への道が開けるのだが、これまで広島チームとの公式戦でド軍が勝ち星をあげたことはなかった。創部以来ずっとド軍の前に大きな壁として立ちはだかつてきた広島。2対3のド軍1点リードで迎えた7回の表、2死1・2塁の大ピンチを三振に切り取っての初勝利！なんと創部15年目にしての快挙であった。

続く2試合目の北九州戦も0対8xで制し、大阪ドームへのチケットをゲット。



しかし、またまた代行の「クジ運」が宿敵大阪を引き寄せる。だが、もはやド軍にとって怖いものはなかった。大阪チームを相手に1対6xの大差で勝利をおさめたのだ。当時のド軍は「全員野球」を目指していた。試合に駆け付けてくれた選手には、たとえ代打でも代走でも、必ず出番を付与して頑張ってもらい、そのうえで試合にもちゃんと勝つ！

勝利の美酒に酔いながら、懇親会恒例の替え歌も披露し、翌日の準決勝・札幌戦に備えたが、残念ながら3対1でド軍は敗退する。もちろん常に勝つことを目指したけれど、それはけっして「勝利至上主義」ではなかった。ひとつひとつのプレーを大切に、チームとして全力を出し切ったけれど残念ながら負けたとき、井口は「惜しかったなあ！」と悔しがると同時に「痺(しび)れるイイ試合だった！」と喜びもした。それこそが我々が目指したド軍の「流儀」であった。





平成 18 (2006) 年：「西日本に1つの枠」を突破！（北九州大会への道）

北九州で決勝大会が開催されることは、Dブロックからの予選出場枠が1チームに絞られることを意味する。「プレ予選」で残った4チーム（沖縄・広島・福岡・神戸）が「ひろぎんの森野球場」に集結し、たった1つの出場枠を争う運びとなった。

トーナメント第一試合は神戸対広島。前年に初勝利を飾ったとはいえ、やはり広島は強敵である。しかし、ド軍はみごとに投打が噛みあい0対3xと勝利をつかみ、予選最終戦に駒を進めて、第二試合・沖縄対福岡戦のゆくえを待つ状況となった。その最終回、福岡は無得点のまま2死無走者の状況であったので、我々は沖縄チームの勝利を確信して3塁側ベンチへの移動を開始した。その刹那、我々の目の前で起こったことは信じられないことだった。最終回2アウトまで福岡の打線をピシヤリと押さえてきた沖縄のエースが突然崩れ、あれよあれよと言う間に逆転サヨナラを食らったのだ。「やっぱりここには魔物がおるんや」と井口がポツリ。平成3年夏、広島との初対戦を思い出したのは、けっして井口だけではなかった。

最終決戦となった福岡戦、ひろぎんの森の魔物は6回の表に牙をむく。1死2塁から左中間に放たれた平凡なフライ…と思いきやド軍の名手レフト林（ふ）がまさかの落球、続く打者にも痛烈な左中間タイムリーを食らって福岡に逆転される。しかし、その裏、2死無走者から井口がセンターオーバーのランニングHRを放ち、手塚・幸寺の連打で再度逆転！ところが、7回の表に福岡が粘って再び同点となる展開。そして迎えた7回の裏、バッターは林（ふ）。その6球目、高めのボールを渾身の力で叩いた打球は左中間を真っ二つに！走る・走る・走る…まるで魔物を振り払うかのように駆け抜け、ホームにヘッドスライディングする林（ふ）。



このときの状況について、林文敏選手からコメントが届いたので以下に掲載する。

「ひろぎんの森」のあのヘッスラですが、サードベースに向かっていた時、たしかサードコーチは迷いながらも止まれの指示を出していたと思うのです。が、同時にベンチから興奮し過ぎて出てきた選手が多数おられて、腕を勝手に回すもんですから止まったらいいのか、進んだらいいのか全く分からず、エイヤ！とホームまで突進したという次第です。あんなにホーム突入の判断が恐ろしかったことはありません（その前にやらかしてますし…）。セーフで良かったという安堵感をこの写真から感じ取ってくだされば…と思います。

ひろぎんの森の魔物によって見事なまでに「演出」されたこのゲーム。ド軍のこれまでの試合で最もシビれたのは？と問われれば、迷わず私は「ダントツでこの試合だ！」と断言する。



さて、北九州大会は一回戦の名古屋戦でド軍は残念ながら力尽きる。そして、井口にとっては、これが最後の全国大会出場となった。



平成 22 (2010) 年：井口寛司選手の「予告引退」

井口捕手が誕生してから 10 年目の節目に、井口は「本年を最後に引退する」と宣言。しかし誰も信じなかった。いや、実は信じたくなかったというべきか。井口のいないドルフィンズなんぞ誰も想像できなかっただけのこと。一種の「正常性バイアス」なのかもしれない。

井口は「最後の一年だけ藤本監督を復活させて欲しい」と提案したが、ド軍選手の心には何も届かなかったようで、まったく議論もないまま沙汰やみとなった。こういうことは事前の根回しが必要なのよ、直球勝負だけでなく変化球も大切…と誰かが言ったかどうかは知らない。

この年の予選最終戦は、神戸・大阪・広島の三つ巴で、初戦の大阪対神戸戦は 7 回の投手戦の末なんと 1 対 1 の引き分け。引き分けの場合のルールはジャンケン勝負。こんな場面に遭遇したことがないド軍はあえなく敗退。それでも 2 試合目の広島戦を 3 対 1 で逃げ切り、最終戦の結果を待つが、大阪が広島をくだして勝負あり。ド軍の「夏」が終わるとともに井口の公式戦もこれが最後となった。「ほんまに引退するん？」何度も聞いたが答えは変わらなかった。この 10 年間、思っていた以上に井口はギリギリのところを「綱渡り」してきたようだ。

大好きな野球を続けるため、井口は試合の1週間前からお酒も断って、体調管理をしっかり行い、仕事もかなりセーブしていたという。そんな状況をいつまで続けられるか…と言う葛藤が井口にはあった。ド軍発足20年目、井口正捕手就任10年目にしての「決意」であった。



平成26(2014)年：井口選手の主戦場はマスターズに！

井口のいないドルフィンズにそろそろ見切りをつけたい…などと代行の心にもモヤモヤが生じかけていた平成25(2013)年、日弁連野球連盟に「新しい風」が吹いた。年齢おおむね43歳以上?を対象にした「マスターズ大会」の発足である。1年目こそ参加できなかったが、2年目からは井口と代行がほぼ毎年参加するようになった。これがまた楽しい！ 当然ながらひま・こまコンビが揃えば懇親会での替え歌が定番となるのだが。



替え歌の歌詞内容を見れば、マスターズ大会の楽しさをご理解いただけると思う。たとえば「北酒場（細川たかし）」の替え歌。「うちの連合軍には/ランナー無視した守備が似合う/投手は投げるだけがいい/ベースに届かなくてもいい/バットを振れば拍手が起こる/チップでもファールでも/絡まる足もほどけぬままに駆け出しこける/北のつどーむだけには/レジェンド/男の時代（とき）がある」

いやいや、ホントはそんなにヒドイ試合ではない（笑）。あくまで誇張なのだけれど。ともかく誰もが楽しめる野球がそこにはあった。毎年、お世話取りをいただく札幌の吉川正也先生をはじめ札幌チームの皆様方には本当に感謝の言葉しかない。井口にとっては、他チームの「名投手」とバッテリーを組めることも楽しみの一つとなった。名古屋の鈴木秀幸投手、広島のを末和政投手、大阪の橋田浩投手などなど、ふだんの試合では絶対に組めないバッテリーが札幌では実現するのだから。こんな楽しいモノを2人だけで独占するテはない。井口はドルフィンズとしてのチーム参加を強く望み、毎年ドルフィンズ・メンバーに声を掛け続け、マスターズ参加者はポツリポツリと増えていったが、チームとしての参加は「夢のまた夢」であった。

令和元（2019）年：マスターズにドルフィンズがチームとして初出場！

井口の思いは令和元（2019年）によようやく叶うことになる。揃ったメンバーはぴったり9名（井口寛司、藤本尚道、松本隆行、藤掛伸之、幸寺覚、吉田裕樹、村上英樹、高本直彰、艸場傑）。おや？と思われたあなたは正しい。最年少の艸場選手はこの時20代、何故にマスターズ参加が可能だったのか？それは「チーム参加の場合は若年者の加入可」という特別ルールによる。ド軍がチーム参加したと言っても、9名だけで2試合を戦うのは厳しい。大阪・京都などからの個人参加選手を加えて「西日本チーム」として戦うことになったが、それでもせめて1イニングくらいはド軍だけで存分に戦わせて欲しい。この希望はかなえられ、19年ぶりに復活した幸寺-藤掛のバッテリーで札幌戦に臨むことに。しかし、さすがは札幌、1回の表に5点をもぎ取る攻勢にド軍もタジタジ。しかし1回のウラにド軍の打線が爆発、打者一巡の猛攻で艸場の柵越え満塁HRも飛び出し一気に大逆転。「今日は勝ちに行く予定」だった吉川先生には申し訳ないが、これも一つの「ご恩返し」とばかり攻守を緩めることなく最後までリードを守り切る。

その夜の「三川屋」での懇親会は、いつものようにひま・こまコンビの替え歌で盛り上がったことをお伝えして、本稿を締めくくりたい。

（文責：藤本 尚道）

